

Title	Factor structures of a Japanese version of the Geriatric Depression Scale and its correlation with the quality of life and functional ability.(Abstract_要旨)
Author(s)	Imai, Hissei
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-03-23
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k18858
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

京都大学	博士 (医 学)	氏 名	今 井 必 生
論文題目	Factor structures of a Japanese version of the Geriatric Depression Scale and its correlation with the quality of life and functional ability (日本語版老年期うつ病尺度の因子構造とクオリティオブライフおよび日常生活機能との関連)		
(論文内容の要旨) <p>【背景】 うつ病尺度は症状項目を点数化し、合計点により病的な状態を判定する。しかし、最近の研究では個々の症状が異なる性質を持つことが示唆されてきた。うつ病尺度の中でも、老年期うつ病尺度(Geriatric Depression Scale; GDS)は老年期に特化した尺度である。超高齢化社会において、この尺度を精査することは重要である。これまで、GDS 及びその短縮 15 項目版 (GDS-15) の因子構造が分析されてきた。しかし、因子の再現性と因子の意味についての検討が不十分であった。これまでの研究では一時点で因子分析をしているのみで、同一集団で因子構造が繰り返し出現するかは検討されていない。実際に、先行研究では GDS-15 の因子数は 2 から 7 と大きなばらつきがある。言語や因子分析方法の違いはあるものの、大きなばらつきがありうる因子構造の信頼性を検討しないのは不十分である。また因子の意味については各因子と身体・精神機能との関連を評価した研究は 2 つあるが、既存の 2 つの研究結果は一貫していない。そこで今回、連続した 2 年の同一集団での GDS-15 データを用い、因子構造を明らかにし、それらの因子と他要素との関連及び、結果の再現性を検証した。</p> <p>【方法】 対象は高知県土佐町の 65 歳以上高齢者(1822 名)のうち、土佐町の健康調査票に回答し (1581 名)、2 年連続で GDS-15 回答の欠損がなかった 736 名を対象とした。2005 年、2006 年の GDS-15 を因子分析し比較した。基本的日常生活機能は 7 項目 3 段階の尺度で評価した。手段的日常生活機能、社会的役割、知的活動能力は老研式活動能力指標を用いて評価した。認知機能は厚生労働省の認知症高齢者の自立度を用い、クオリティオブライフはヴィジュアルアナログスケールを用い、主観的健康、家族関係、友人関係、経済満足度、主観的幸福感を評価した。年齢、性別、教育年数、配偶者の喪失、独居も含め、明らかになった因子との関連を検討した。</p> <p>【結果及び考察】 3 因子が抽出された。第一因子は家に居たい、将来への不安、周りの人のほうが幸せ、活動・興味の低下、無力感、物忘れが気になる、活力にあふれている、第二因子は生活に満足している、たいてい機嫌がよい、自分が幸福、活力にあふれている、第三因子は、生活が空虚、毎日退屈、生きていても仕方がない、から成った。因子を構成する項目および他指標との関連は連続する 2 年でほぼ同一だった。第一因子には自覚的認知機能、第三因子には希死念慮に関する項目が含まれており、同種類の項目は他の因子には存在しなかった。第二因子はポジティブに表現された項目群で、先行研究から ADL、疾病の発症、死亡との関連がある可能性が考えられる。以上よりこれらの因子をサブスケール化することで临床上重要なアウトカムの評価や予測に使用できる可能性が示唆された。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

うつ病尺度は個々の症状項目が異なる性質を持つことが示されてきた。超高齢化社会で Geriatric Depression Scale(GDS)の因子構造を明らかにすることは重要である。しかし、先行研究では、再現性、因子の意味の検討が不十分であり、本研究ではそれらを明らかにすることを目的とした。高知県 T 町の 65 歳以上高齢者で 2 年連続 GDS の欠損がない 736 名を対象とし、2005 年、2006 年の GDS を因子分析した。日常生活機能(ADL)、クオリティオブライフ(QOL)などとの関連も検討した。解析の結果 GDS は 1 因子性が強い構造を持っていたが、GDS 因子分析レビュー結果では複数の因子が仮定されており、GDS の一部の項目群のみが ADL 障害を予測することが示されていたため、複数因子を仮定する研究が必要と考え、Kaiser の基準により 3 因子を仮定し因子抽出を行った。その結果、因子を構成する項目および他指標との関連は連続する 2 年でほぼ同一だった。第一因子には自覚的認知機能、第三因子には希死念慮に関する項目が含まれており、同種類の項目は他の因子には存在しなかった。第二因子はポジティブに表現された項目群で、先行研究から ADL、疾病の発症、死亡との関連がある可能性が考えられる。以上よりこれらの因子をサブスケール化することで临床上重要なアウトカムの評価や予測に使用できる可能性が示唆された。

以上の研究は、うつ病評価スケール (GDS) を複数の因子と捉え再現性を解明し、因子の臨床応用に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士 (医学) の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成 26 年 12 月 19 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日： 年 月 日以降